さいかち淵

宮沢賢治

青空文庫

八月十三日

さいかち淵なら、ほんとうにおもしろい。

しゅっこだって毎日行く。しゅっこは、舜一なんだけれども、みんなはいつでもしゅっこという。そういわれても、しゅっこは少しも怒らない。だからみんなは、いつでもしゅっこしゅっこという。ぼくは、しゅっことは、いちばん仲がいい。きょうもいっしょに、出かけて行った。

ぼくらが、さいかち淵で泳いでいると、発破をかけに、大人も来るからおもしろい。今日のひるまもやって来た。

石神の庄助がさきに立って、そのあとから、練瓦場の人たちが三人ばかり、肌ぬぎになったり、網を持ったりして、河原のねむの木のとこを、こっちへ来るから、ぼくは、きっと発破だとおもった。しゅっこも、大きな白い石をもって、淵の上のさいかちの木にのぼっていたが、それを見ると、すぐに、石を淵に落して叫んだ。

「おお、発破だぞ。知らないふりしてろ。石とりやめて、早くみんな、下流へさがれ。」そこでみんなは、なるべくそっちを見ないようにしながら、いっしょに下流の方へ泳いだ。しゅっこは、木の上で手を額にあてて、もう一度よく見きわめてから、どぶんと逆まに淵へ飛びこん

だ。それから水を潜って、一ぺんにみんなへ追いついた。

ぼくらは、淵の下流の、瀬になったところに立った。

「知らないふりして遊んでろ。みんな。」しゅっこが云った。ぼくらは、砥石をひろったり、せきれいを追ったりして、発破のことなぞ、すこしも気がつかないふりをしていた。

向うの淵の岸では、庄助が、しばらくあちこち見まわしてから、いきなりあぐらをかいて、砂利の上へ座ってしまった。それからゆっくり、腰からたばこ入れをとって、きせるをくわいて、ぱくぱく煙をふきだした。奇体だと思っていたら、また腹かけから、何か出した。「発破だぞ、発破だぞ。」とぺ吉やみんな叫んだ。しゅっこは、手をふってそれをとめた。庄助は、きせるの火を、しずかにそれへうつした。うしろに居た一人は、すぐ水に入って、網をかまえた。庄助は、まるで電車を運転するときのように落ちついて、立って一あし水にはいると、すぐその持ったものを、さいかちの木の下のところへ投げこんだ。するとまもなく、ぼぉというようなひどい音がして、水はむくっと盛りあがり、それからしばらく、そこらあたりがきぃんと鳴った。練瓦場の人たちは、みんな水へ入った。

「さあ、流れて来るぞ。みんなとれ。」としゅっこが云った。まもなく、小指ぐらいの茶いろなかじかが、横向きになって流れて来たので、取ろうとしたら、うしろのほうで三郎が、まるで瓜をするときのような声を出した。六寸ぐらいある鮒をとって、顔をまっ赤にしてよろこんでいたのだった。「だまってろ、だまってろ。」しゅっこが云った。

そのとき、向うの白い河原を、肌ぬぎになったり、シャツだけ着たりした大人や子どもらが、たくさんかけて来た。そのうしろからは、ちょうど活動写真のように、一人の網シャツを着た人が、はだか馬に乗って、まっしぐらに走って来た。みんな発破の音を聞いて、見に来たのだ。

庄助は、しばらく腕を組んで、みんなのとるのを見ていたが、「さっぱり居ないな。」と云った。けれども、あんなにとれたらたくさんだ。練瓦場の人たちなんか、三十疋ぐらいもとったんだから。ぼくらも、一疋か二疋なら誰だって拾った。庄助は、だまって、また上流へ歩きだした。練瓦場の人たちもついていった。網シャツの人は、馬に乗って、またかけて行ったし、子どもらは、ぼくらの仲間にはいろうと、岸に座って待っていた。

「発破かけだら、雑魚撒かせ。」三郎が、河原の砂っぱの上で、ぴょんぴょんはねながら、高く叫んだ。

ぼくらは、とった魚を、石で囲んで、小さな生洲をこしらえて、生き返っても、もう遁げて行かないようにして、また石取りをはじめた。ほんとうに暑くなって、ねむの木もぐったり見えたし、空もまるで、底なしの淵のようになった。

そのころ誰かが、

「あ、生洲、打壊すとこだぞ。」と叫んだ。見ると、一人の変に鼻の尖った、洋服を着てわらじをはいた人が、鉄砲でもない槍でもない、おかしな光る長いものを、せなかにしょって、手にはステッキみたいな鉄槌をもって、ぼくらの魚を、ぐちゃぐちゃ掻きまわしているのだ。み

んな怒って、何か云おうとしているうちに、その人は、びちゃびちゃ岸をあるいて行って、それから淵のすぐ上流の浅瀬をこっちへわたろうとした。ぼくらはみんな、さいかちの樹にのぼって見ていた。ところがその人は、すぐに河をわたるでもなく、いかにもわらじや脚絆の汚なくなったのを、そのまま洗うというふうに、もう何べんも行ったり来たりするもんだから、ぼくらはいよいよ、気持ちが悪くなってきた。そこで、とうとう、しゅっこが云った。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶこだ。いいか。

あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生云うでないか。一、二い、三。」

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生云うでないか。」その人は、びっくりしてこっちを見たけれども、何を云ったのか、よくわからないというようすだった。そこでぼくらはまた云った。

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生、云うでないか。」鼻の尖った人は、すぽすぽと、煙草を吸うときのような口つきで云った。

「この水呑むのか、ここらでは。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云うでないか。」鼻の尖った人は、少し困ったようにして、また云った。

「川をあるいてわるいのか。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云うでないか。」その人は、あわてたのをごまかすように、わざとゆっくり、川をわたって、それから、アルプスの探険みたいな姿勢をとりながら、青い粘土と赤砂利の崖をななめにのぼって、せなかにしょった長いものをぴかぴかさせながら、上の豆畠へはいってしまった。ぼくらも何だか気の毒なような、おかしながらんとした気持ちになった。そこで、一人ずつ木からはね下りて、河原に泳ぎついて、魚を手拭につつんだり、手にもったりして、家に帰った。

八月十四日

しゅっこは、今日は、毒もみの丹礬をもって来た。あのトラホームの眼のふちを擦る青い石だ。あれを五かけ、紙に包んで持って来て、ぼくをさそった。巡査に押えられるよと云ったら、田から流れて来たと云えばいいと云った。けれども毒もみは卑怯だから、ぼくは厭だと答えたら、しゅっこは少し顔いろを変えて、卑怯でないよ、みみずなんかで、だまして取るよりいいと云って、あとはあんまり、ぼくとは口を利かなかった。その代りしゅっこは、そこら中を、一軒ごとにさそって歩いて、いいことをして見せるからあつまれと云って、まるで小さなこど

もらまで、たくさん集めた。

　ぼくらは、蝉が雨のように鳴いているいつもの松林を通って、それから、祭のときの瓦斯のような匂のむっとする、ねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵に行った。今日なら、もうほんとうに立派な雲の峰が、東でむくむく盛りあがり、みみずくの頭の形をした鳥ヶ森も、ぎらぎら青く光って見えた。しゅっこが、あんまり急いで行くもんだから、小さな子どもらは、追いつくために、まるで半分馳けた。みんな急いで着物をぬいで、淵の岸に立つと、しゅっこが云った。

「ちゃんと一列にならべ。いいか。魚浮いてきたら、泳いで行ってとれ。とったくらい与るぞ。いいか。」小さなこどもらは、よろこんで顔を赤くして、押しあったりしながら、ぞろっと淵を囲んだ。ぺ吉だの三、四人は、もう泳いで、さいかちの木の下まで行って待っていた。

　しゅっこが、大威張りで、あの青いたんぱんを、淵の中に投げ込んだ。それから、みんなしいんとして、水をみつめて立っていた。ぼくは、からだが上流の方へ動いているような気持ちになるのがいやなので、水を見ないで、向うの雲の峰の上を通る黒い鳥を見ていた。ところがそれからよほどたっても、魚は浮いて来なかった。しゅっこは大へんまじめな顔で、きちんと立って水を見ていた。昨日発破をかけたときなら、もう十疋もとっていたんだと、ぼくは思った。またずいぶんしばらくみんなしいんとして待った。けれどもやっぱり、魚は一ぴきも浮いて来なかった。

「さっぱり魚、浮ばないよ。」三郎が叫んだ。しゅっこはびくっとしたけれども、まだ一しんに水を見ていた。

「魚さっぱり浮ばないよ。」ペ吉が、また向うの木の下で云った。するともう子どもらは、がやがや云い出して、みんな水に飛び込んでしまった。

しゅっこは、しばらくきまり悪そうに、しゃがんで水を見ていたけれど、とうとう立って、「鬼っこしないか。」と云った。「する、する。」みんなは叫んで、じゃんけんをするために、水の中から手を出した。泳いでいたものは、急いでせいの立つところまで行って手を出した。しゅっこが、ぼくにもはいらないかと云ったから、もちろんぼくは、はじめから怒っていたのでもないし、すぐ手を出した。しゅっこは、はじめに、昨日あの変な鼻の尖った人の上って行った崖の下の、青いぬるぬるした粘土のところを根っこにきめた。そこに取りついていれば、鬼は押えることができない。それから、はさみ無しの一人まけかちで、じゃんけんをした。ところが、悦治はひとりはさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼になった。悦治は、唇を紫いろにして、河原を走って、喜作を押えたもんだから、鬼は二人になった。それからぼくらは、砂っぱの上や淵を、あっちへ行ったり、こっちへ来たり、押えたり押えられたり、何べんも鬼っこをした。

しまいにとうとう、しゅっこ一人が鬼になった。しゅっこはまもなく吉郎をつかまえた。ぼくらはみんな、さいかちの木の下に居てそれを見ていた。するとしゅっこが、吉郎、汝、上流

から追って来い、追え、追え、と云いながら、じぶんはだまって立って見ていた。吉郎は、口をあいて手をひろげて、上流から粘土の上を追って来た。みんなは淵へ飛び込む仕度をした。ぼくは楊の木にのぼった。そのとき吉郎が、たぶんあの上流の粘土が、足についたためだったろう、みんなの前ですべってころんでしまった。みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水に入ったりして、上流の青い粘土の根に上ってしまった。

「しゅっこ、来。」三郎は立って、口を大きくあいて、手をひろげて、しゅっこをばかにした。するとしゅっこは、さっきからよっぽど怒っていたとみえて、「ようし、見てろ」と云いながら、本気になって、ざぶんと水に飛び込んで、一生けん命、そっちの方へ泳いでいった。子どもらは、すっかり恐がってしまった。第一、その粘土のところはせまくて、みんながはいれなかったし、それに大へんつるつるすべる傾斜になっていたものだから、下の方の四、五人などは上の人につかまるようにして、やっと川へすべり落ちるのをふせいでいた。三郎だけが、いちばん上で落ち着いて、さあ、みんな、とか何とか相談らしいことをはじめた。みんなもそこで、頭をあつめて聞いている。しゅっこは、ぼちゃぼちゃ、もう近くまで行っていた。みんなは、ひそひそはなしている。するとしゅっこは、いきなり両手で、みんなへ水をかけ出した。みんながばたばた防いでいたら、だんだん粘土がすべって来て、なんだかすこし下へずれたようになった。しゅっこはよろこんで、いよいよ水をはねとばした。するとみんなは、ぼちゃんぼちゃんと一度に水にすべって落ちた。しゅっこは、それを片っぱしからつかまえた。三郎

ひとり、上をまわって泳いで遁げたら、しゅっこはすぐに追い付いて、押えたほかに、腕をつかんで、四、五へんぐるぐる引っぱりまわした。三郎は、水を呑んだとみえて、霧をふいて、ごほごほむせて、泣くようにしながら、

「おいらもうやめた。こんな鬼っこもうしない。」と云った。子どもらはみんな砂利に上ってしまった。三郎もあがった。しゅっこは、そっと、あの青い石を投げたところをのぞきながら、さいかちの樹の下に立っていた。

ところが、そのときはもう、そらがいっぱいの黒い雲で、楊も変に白っぽくなり、蝉があがあ鳴いていて、そこらは何とも云われない、恐ろしい景色にかわっていた。

そのうちに、いきなり林の上のあたりで、雷が鳴り出した。と思うと、まるで山つなみのような音がして、一ぺんに夕立がやってきた。風までひゅうひゅう吹きだした。淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまった。河原にあがった子どもらは、着物をかかえて、みんなねむの木の下へ遁げこんだ。ぼくも木からおりて、しゅっこといっしょに、向うの河原へ泳ぎだした。そのとき、あのねむの木の方かどこか、烈しい雨のなかから、

「雨はざあざあ、ざっこざっこ、

風はしゅうしゅう、しゅっこしゅっこ。」

というように叫んだものがあった。しゅっこは、泳ぎながら、まるであわてて、何かに足をひ

っぱられるようにして遁げた。ぼくもじっさいこわかった。ようやく、みんなのいるねむのはやしについたとき、しゅっこはがたがたふるえながら、

「いま叫んだのはおまえらだか。」ときいた。

「そでない、そでない。」みんなは一しょに叫んだ。ペ吉がまた一人出て来て、「そでない。」と云った。しゅっこは、気味悪そうに川のほうを見た。けれどもぼくは、みんなが叫んだのだとおもう。

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店
　　1996（平成8）年3月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　1995（平成7）年5月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：ゆうき
校正：noriko saito
2010年9月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さいかち淵

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/